



三角の島影著し甘^き蔗^び月夜
チンドン屋木の葉の渦に巻き込まれる
死者思ふはいつも甘美や霜の声
鶴唳や父の忌の畝高くして
魂のふつと離るる暖房車
看護とは失恋に似て帰り花
日翳れば綿虫も綿重たかろ
桐一葉わが身に欲しき狂気かな
嬢^{かみ}どちのガンガン部隊暖房車
蔑ろにできぬ憲法九条葱
淋しさの極み真赤なりんご描く
撃たれても鹿の眼は湖の色
杉の秀に菩薩のような冬の鷺

眞榮城いさを
唐澤南海子
岩井かりん
中岡草人
竹岡みち子
柳澤和子
保高弘子
吉澤清
山田一政
小泉信
藤澤雅子
志摩晴樹
小澤育子
吉池史江
依田ひろ

渾泥の積年の香よ菱の実は
鮫の眼と歯を持つ詩人光晴は
氷鈴や林帯風の音を立て
山羊の乳貰ひにゆけり草氷柱
木枯を背に悲しみのふつふつと
一生は自力百歳神の留守
海境へ神の道あり冬の月
綿虫や会津三泣き諾へる
去るを待つ目眩の中や年の暮
東京は行列ばかり牡丹鍋
煩惱はつねに新鮮冬紅葉
冬の月錯視となりて豊かなり
冬薔薇木端微塵の恋もある

今井愛子
後藤行雄
北見弟花
降籬康
林信子
豊山れい子
中山賢助
佐藤映二
加田クミ子
西岡嶺子
岩間嘉一
青木聡
木村さとみ
浅井博
高橋節子

岳・見えたるひかり 二月

(474)

宮坂 静生

― 同人集・岳集・青雲集から

はじめに。ささやかでもいい、目指す目標を持つこと。生きがいになる。漠然と生きないこと。新鮮さを暮しに作り出す。

宮古島への郷愁

三角の島影著し甘蔗月夜 眞榮城いさを

これが冬の光景なのに感動する。「甘蔗月夜」は、宮古島や沖縄では十二月から一月の畑風景。向うに三角の島影がはっきりと見渡せるのも、本土ではない、八重山諸島か宮古島あたり。島影が「三角」というやせた鋭さも心にひびく。

チンドン屋木の葉の渦に巻き込まれる 唐澤南海子

風が立つ公園あたり。無雑作なチンドン屋の動きが自然。そこから職業を超えた生きるかなしみが読み手に伝わる。

死者思ふはいつも甘美や霜の声 岩井かりん

死者に鞭打つようなことはしたくない。死者への「甘美」な思いが生きる力にもなる。強霜の無韻の寒さも心情を引き立てている。

の中で綿虫への気遣いが生まれた。巧みである。

桐一葉わが身に欲しき狂気かな 吉澤 清

高名な書家。吉澤大淳先生。深奥深遠を究めている芸術魂「狂気」の一言はさすがと思う。狂気から遠く凡々たる邪気の中で、のたうつエネルギーもなくなってきた愚生にとり、天下の秋の大気を身に「狂気」を思うひとときは夢のごとしである。

蔑ろにできぬ憲法九条葱 小泉 信

京の緑葉ゆたかな九条葱。「憲法九条」と「九条葱」との

今月の秀句

嬢どちのガンガン部隊暖房車 山田 一政

ブリキ缶に魚を入れ、列車を乗り継いでの行商。中年女性が千名ほどという、秋田八郎潟の漁村風景。大騒ぎをして冬の朝の名物風景。「ガンガン部隊」の呼称が秀逸だ。これこそ地貌俳句。生活丸出し。生きる上に気取りなど一切不要。東北地域でも秋田ほど、土地の風習や風俗がいまに生きている地は他にないのではないか。それを詠えばよい。のっぺりした都会俳句の類想ある光景とは違う。

鶴喉や父の忌の畝高くして 中岡 草人

九州の出水か中国の山口辺か。畑中が鶴の溜り場となり、鳴き交わす声がひびく。「父の忌の畝」は直接鶴とはかわりが薄いが、生前父が丹精していた畑の高畝の印象がふと思いうかんだものか。父恋の句として印象に残った。

魂のふつと離るる暖房車 竹岡みち子

暖房車の心地よさに体から魂が抜け出したという。遊魂。夢をみているときなど、魂の仕業と思う。多彩な句柄の作者。

看護とは失恋に似て帰り花 柳澤 和子

一つの見方として鋭い。あんなに好きだった人がという気持。人生とは切ないものよ。手のかかる看護には浪漫などない。厳しい現実そのもの。狂咲きの配し方も考えている。

日翳れば綿虫も綿重たかる 保高 弘子

綿虫が付けている綿など重さを気遣ったことはなかった。日がかげり、急に寒くなる。あたりのメリハリを失った空気

掛詞。あれこれ叫んでみたが、信さんも考え、素朴なお笑い掛詞でいこうと着想した。私も、理屈よりもこの手に賛成。緑葉ゆたかな憲法の枝葉一切、手をつけないのが上々。

淋しさの極み真赤なりんご描く 藤澤 雅子

北安曇郡池田町れんげ野句会の雅子さんが逝去。画家一心。「赤いリンゴ」は戦後のシンボルであった。それがいつもひとり暮しの孤独の極みに。好奇心旺盛な俳人でもあった雅子さんのご冥福を祈る。享年八十二。平成三十年十二月逝去。

撃たれても鹿の眼は湖の色 志摩 晴樹

撃たれた鹿への憐れをロマンに。これもアニメイズム。かえってそこに異類への愛情がこめられるのであろう。

杉の秀に菩薩のような冬の鷺 小澤 育子

比喩が生きている。身動きしない鷺へのいたわりがいい。

他に推薦候補作をあげておく。

壘の中の戦艦十二月八日 満田 光生
雪迎手つかずの空ありにけり 久保美智子
去年今年縄文火焰土器の魄 小泉 千波

兎吊りモンマルトルの夜の肉屋 平成九年

「岳」（平成九年三月号）所載。一九九五年元日の夜であったか、モンマルトルの横丁の肉屋風景。皮を剥いた兎の赤裸の肉を店先に吊るし、裸電球と揺れていた。度肝を抜かれた。これがヨーロッパと、直感である。いまでも忘れ難い。「ユトリロの冬木がどれも病み入る」

「青春につづく晩年パリは冬」（村上護推称作）も同時の作。ムーランルージュの踊り子の唄ではないが、しきりにユトリロの身の上を思った。『山の牧』所収。

鶏に花降りつもる 浄瑠璃寺 平成九年

「俳句研究」（平成九年四月号）所載。奈良坂を越え、浄瑠璃寺へはよく行った。民宿へ泊ったこともある。放し飼いの鶏が縁に上がり鳴き、のんびりした春。「さえざえと鴉羅童子さくらどき」も同時作。丈は低いが、すがすがしい顔の童子がいい。別天地。『山の牧』所収。

虫の音に充たされ宙の象なす 平成九年

「岳」（平成九年十月号）所載。平成九年には「青梅をごろごろ洗ふ今がよき」という句がある。半生でも、句がよくできた、好調な時期であった。ヨーロッパの旅から帰り、四月から信州大学医療技術短期大学（三年制）部部長に選出される。教養系から医療技術系の大学責任者になるとは夢にも思わなかったことで、ここで、人生が転換。従来の死生学関係の勉強に力を入れるだけでなく、大学運営に本格的に参画。文部省に出向くことも多くなる。二十四時間が足りない日々が続く。以後三選され、六年間忙殺。ところが性格なのか、忙しいほど、あれこれ関心が深まるのであった。

掲句は「加藤慶二郎」と前書。親交のあった筑波大学ドイツ文学教授（現名誉教授）をつくば市上ノ室に訪問。虫の音が丸やかに響き、筑波山麓の秋が世界の秋の感じであった。現在病床にある先生のご快癒を祈る。

アルトハイデルベルヒの城の馬追は 平成九年

「岳」（同上）所載。マイアーフェルスター『アルト・ハイデルベルク』（番匠谷英一訳）が好きで、ハイデルベルヒはあこがれの都市。いつか行きたいと夢みていた。たまたま長女一家がドイツのシュトゥットガルトにいる。ハイデルベルヒに近い。今夏実現しそうなのがうれしい。その古城に馬追がいるような気がしてならない。学生時代望月市恵先生がドイツ語テキストにハイネの『ドイツ古典哲学の本質』を使われた。テストは岩波文庫版の伊東勉訳の丸暗記。よせばいいのに、その先まで訳しすぎ、やっているぞといったところを見せ、落ちてしまった。

出稼ぎの夫やぼんかんほどの距離 依田 ひろ

「ぼんかんほどの距離」とはどんな距離か。こんな句がある。〈屠蘇散や夫は他人なので好き〉（池田澄子）。べたべたしない夫。掲句も適当に離れ、あれこれ身邊の些事に口を出さない。ぱりっと皮が剥けるぼんかん。甘さも結構。ぼんかんとわれ関せずではないが、しばらく留守が丁度いい。快活な妻の姿が目に見えるようだ。一句のテンポが楽しい。

潟泥の積年の香よ菱の実は 今井 愛子

信濃川の河口、新潟にはいくつかの〈潟湖〉がある。潮の満ち干により砂地が隠れたり現れたり。泥のにおいが強い。そこに菱が繁茂している。地味な地形の句であるが、風土色が滲んだ手堅い句。菱の实の鋭いとげは積年の恨みのように触れると痛い。風景句も特異な光景は力がある。

鮫の眼と歯を持つ詩人光晴は 後藤 行雄

詩人金子光晴がお好きなのであろう。その特徴を〈鮫の眼と歯〉との犀利な比喻で言い、昭和の時代社会への強烈な批判精神をぶつけたスケールの大きな詩人を彷彿とさせた。知識だけでなく知情一体化した表現は都会俳句の本領。日常からいかに個性的な句を積み上げるか、そこが勝負どころ。

氷鈴や林帯風の音を立て 北見 弟花

針葉樹林帯に小さな氷柱がぶらさがり、氷柱同士が小さな音を立てる。それを〈氷鈴〉というとか。旭川在住の作者がかつて小檜山博氏から教わったことを知らせてくれた。珍しい句例なので採り上げてみた。

山羊の乳貰ひにゆけり草氷柱 降旗 康

昭和三十年代頃までは農村の日常風景。牛乳ではなく山羊の乳が草深い田舎を思わせる。南安曇郡の旧梓川村出身。

木枯を背に悲しみのふつつと 林 信子

不意に大動脈剝離により逝去。句会に出て元氣だった、その夕方のこととは信じがたい。こんな句が投句されていた。

一生は自力百歳神の留守 豊山れい子

神だのみでなく〈自力百歳〉でいこう。諺のような一句であるが、これを目標に。一日の積み重ねが百歳まで。精進。

海境へ神の道あり冬の月 中山 賢助

沖の先にあるという海神の国との海境。鏡のような冬月。仙台在住の作者だけに、三・一一以後の祈る思いの表現か。

綿虫や会津三泣き諾へる 佐藤 映二

三泣きとは寒さ・人のやさしさ・別れ難さ。〈会津三泣き〉

の俗言が初冬の綿虫の日だけに生きている。郷愁は清冽。

去るを待つ目眩の中や年の暮 加田クミ子

体調がおもわしくないのか。年末だけに心急ぐ。こんなことも一句になる。句にして、気分がいく分楽になったものか。

東京は行列ばかり牡丹鍋 西岡 嶺子

牡丹鍋（猪肉料理）の店の行列。おいしいと評判が立つとどっと行列ができる。徳島在住の作者の目からみた東京風景。〈行列ばかり〉は興味半分、批評半分。季語がいい。

煩惱はつねに新鮮冬紅葉 岩間 嘉一

今月の秀句

地下鉄はすべる柩か小夜時雨 吉池 史江

大胆な比喻にびっくりした。列車がトンネルに入る。このまゝ出なかったらどうしようと思う。ましてや地下鉄は、ほとんど地中を走る。先のようなことを常に思う。「柩」とはその不安を具体化した表現だ。宵のうちの時雨。京都あたりの地下鉄での着想か。のんびりした初冬の雨を配しているが、喩えは鋭い。現代社会は、こんな不安を抱えながら、一旦ことが起きれば大惨事というのが実情。意欲的な句である。

煩惱を新鮮とはっきりいった点が珍しい。煩惱は手枷足枷となり嫌われるもの。それをプラスに評価した積極性に創造者の決意を感じる。

冬の月錯視となりて豊かなり 青木 聡

「錯視」とは、いろいろ視えることについていう医学用語。冬のお月さまがゆがんで見える。ときにそれがかえっておもしろい。「豊か」とはなかなかの腹の据わりよう。

冬薔薇木端微塵の恋もある 木村さとみ

さてどんな恋であろうか。恋はロマンチックにほんわかと容をもつもの。これが通常のイメージ。好きなのか、悩んでいるのか、当人同士がわからない恋。現代の恋か。

青雲集から―休詠しないように。

満行の二十一日冬の滝 浅井 博

須坂郊外米子里宮の滝湯へ、真冬の夜間二十一日間の荒行により、急性心不全を治したという。氷点下十一度との闘いとは壮烈。

鎌風や炎の遊ぶるくる物 高橋 節子

〈鎌風〉はかまいたち。寒中のろくろ場の設定が特異。

外に〈手套してものみなとほくなりにつけり〉（小池孝雄）にも注目した。手套をしたときの隔世感か。